ならちゅうしん経営研究会　例会報告

第 370 回　研究会

日　時　　令和 5 年 12 月 20 日（水）　午後 4 時　～　午後 5 時 30 分
場　所　　奈良中央信用金庫　3 階　ホール
講　師　　信金中央金庫　地域・中小企業研究所
上席主任研究員　角田　匠（つのだ　たくみ）氏
テーマ　　「コロナ禍の停滞から回復に向かう日本経済」
～経済活動の正常化で景気は緩やかながらも回復が続く見通し～

年末の恒例となりました経済セミナーを開催しました。
冒頭に芳仲会長より“12 月恒例のテーマは日本経済はどうなるのかという皆が非常に関心を持っている内容です。今日の話をしっかり参考にして、事業や計画の中に落とし込んでいきたい”と開会のご挨拶を頂きました。

例年どおり信金中央金庫の角田先生を招いて、今回は「コロナ禍の停滞から回復に向かう日本経済」と題して、コロナ禍で停滞していた経済活動がほぼ正常に戻り景気は緩やかながらも回復が続くなどについて、お話を頂きました。

角田先生は日本経済新聞社のシンクタンクである「日本経済研究センター」より、経済予測について優秀な成績を納められたキャスターに贈られる「ＥＳＰ優秀フォーキャスター」に 2017 年度に続いて 2021 年度、2022 年度にも選ばれた日本を代表するエコノミストです。

まず、コロナ禍で停滞していた客足の動きが、コロナ前の水準まで持ち直しているとのことです。今年の秋の行楽シーズンでは、2019 年以上の人の動きが出ていました。人が動くとサービス消費も増えるもので、旅行、外食が戻り、インバウンドにおいては急速に回復しており過去のピーク時の数字まで戻ってきています。ただ、中国人観光客は戻っていません。奈良県は飲食・宿泊などサービス業の構成比が高い県ですが、中国人に人気の高い地域のため、外国人宿泊者数の回復が遅れています。

半面、製造業は依然厳しい状況が続いています。大企業は円安、自動車関連の回復により持ち直してきている一方、中小企業の製造業は厳しい状況です。これは世界的に製造業の活動が減速していることの現れです。半導体不足の緩和により調達が進むようになり、自動車関連は良くなってきていますが、それ以外の製造業は減速しています。半導体サイクルは底打ち、2024 年にかけてＩＴ需要は本格回復する模様です。半導体の成長期待を反映して半導体に関連する投資が非常に活発化してきています。国内外の半導体メーカーが国内に大規模投資を推進し半導体工場の建設が多数予定されています。

原材料高はまだまだ止まっていません。大企業は円安によって収益は改善する一方、中小

企業は厳しい状況が続いています。中小企業にとって円安はコスト高にしかならず、価格転嫁ができていません。

賃金が上がってきていますが、大企業の話であり、中小企業ではほぼ上がっていません。しかし、個人消費を見てみると実はそれほど落ち込んでおらず、消費活動が正常化してきており、所得に見合うような消費水準まで戻ってきています。また、日本には超過貯蓄がかなり残っていると見られ、これが個人消費をささえていると思われます。欧米では、コロナの影響で落ちた経済活動が回復してきていますが、日本は出遅れており、その分回復の余地があると見ることができます。

経済の正常化を受けて金融正常化に向け、日銀が政策変更に動き始めマイナス金利解除があるのではと見られています。マイナス金利解除をして、イールドカーブ・コントロール（ＹＣＣ）を事実上廃止し日銀は段階的に緩和政策を修正していくのではという見方があります。円安の最大の要因はアメリカの金利上昇ですが、これが今少し下がってきています。ＦＲＢはアメリカの金融施策が今の水準で打ち止めとほのめかしており、アメリカの景気減速、インフレ圧力緩和でアメリカの金融引き締めは終了し、アメリカの長期金利は低下、為替相場はドル売りの方向に動けば、円は 120 円から 130 円に落ち着くと見られます。

最後に来年の日経平均株価を予想頂きました。趨勢的な動きを示す 200 日移動平均線が上がってきており、こういう時はなかなか株価は下がらないものです。過去最高値の 38,915 円を超えてくる可能性も十分あると思われます。

毎年恒例の干支のお話しでは、「卯跳ねる」「辰巳天井」という格言があり、うさぎ年から来年の辰年、再来年の巳年まで過去を平均してみても 3 年連続で高い上昇が起きています。株価は堅調だということは、経済もそれなりに悪くないということだと予想されました。

講演のあとも、参加者より世界の経済動向に対する多くの質問、賃金や為替相場について参加者からの意見発表もあり、盛況を持ちまして、2023 年の経営研究会を締めくくりました。

以　上

芳仲会長　ご挨拶

講師　信金中央金庫　地域・中小企業研究所　角田匠氏